京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

2024 年 9 月 22 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　藤　　洋 作　様

所属部局・研究科　教育学研究科

職 名・学 年　博士後期課程3回生

氏　　名　河野 真子

助成の種類	令和6年度　・　国際研究集会発表助成		
研究集会名	オックスフォードエスノグラフィー・教育カンファレンス 2024 (Oxford Ethnography and Education Conference 2024)		
発表形式	☐ 招待　・　☒ 口頭　・　☐ ポスター　・　☐ その他(　　)		
発表題目	Situated learning in doctoral education: The case of the *kenkyūshitsu* in Japan		
開催場所	オックスフォード大学（ニューカレッジ）		
渡航期間	2024 年　8 月 31　日　～　2024 年 9　月 9　日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　☒ 無　☐ 有(　　)		
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000 円	
	使用した助成金額	350,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した経費総額をご記入ください)	費　目	金額(円)
		航空運賃	287,870
		学会参加費	61,499
		その他(国内空港バス)	5,100
		その他(現地空港バス)	6,843
		以上に助成金を充当	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 博士後期課程の2年目までは社会人学生として仕事をしていたため、研究費を伴う各種奨学金へ申請ができなかった背景があり、このような助成がなければ国際学会への参加は経済的に困難でした。感謝申し上げます。また、申請・報告の手続きが分かりやすいことも大変助かりました。学会開催のタイミングが航空運賃が高い時期、かつ、円安のピーク時と重なり想定外の金額になったため、宿泊費までカバーすることができませんでしたが、これは為替レートや日程により大きく変化するものかと思います。		

成果の概要／河野真子

１．Oxford Ethnography and Education Conference (OEEC)について

今回参加をしたOEECは、「エスノグラフィーの手法を用いる教育分野」の研究に特化した国際研究集会です。初めて参加したのですが、濃密な議論が可能になる工夫がなされているものでした。まず3日間で発表数は35本に限定されることで、１つの発表に集まる人数がある程度確保されます。次に、発表内容は事前に論文の体裁で共有され、参加者は事前に論文を読んでくることが求められます。これにより内容を理解した上での深いフィードバックが期待できます。また、質疑応答の時間も各発表で少なくとも30分間が確保されるので、フィードバックへの回答も含めて議論が深まります。さらに、Taylor & Francisから発行されている国際ジャーナルEthnography and Educationと連携しており、主要な編集者が参加しているのも特徴の一つです。今回の発表も、直接編集者の方々からも意見をもらうことで同ジャーナルへの投稿に繋がる可能性を期待して参加しました。

長い歴史を持つOEECは、途中の数年間を除いて継続してオックスフォード大学の中でも古い歴史を持つニュー・カレッジを会場として開催されていることも特徴に上げられるかと思います。50名程度に限定された参加者が発表・議論の場以外でも、伝統的なカレッジの建物を見学したり、特別な雰囲気を持つダイニングホールで一緒に昼食を取る中でコミュニケーションが促進され、お互いについて知る機会になり、参加者は自然と同分野の研究者ネットワークに入っていくことができます。

２．研究発表と参加の成果

様々な学びがあったのですが、具体的には特に次の２点から博士研究を大きく前進させる機会となりました。１つめは、発表内容を事前に英語で論文のかたちでまとめる必要があるものであったことです。エスノグラフィーという手法では、膨大なデータをどのように学術的な議論としてまとめるか、という「書く」プロセスが重要となります。私の研究は日本の教育実践を対象としており、日本の文化・教育制度の背景を知らないオーディエンスに伝わるように必要な情報を含めつつ、出来る限りシンプルに書くこと、日本語でしか表現できないニュアンスを英語で伝えるというチャレンジがあり、実際に書くプロセスを後回しにしがちになっていました。今回は明確な締め切りがあることで「とにかく書いてみる」ことに着手をすることができました。また、実際に書きたいことについての英語の表現を推敲する作業を得たことで、口頭で説明する力の向上にもつながりました。

２つめは、発表に対する有益なフォードバックを得たことです。日本からの参加者が私１人だけだったので、オーディエンスは全員国外の方で、国外の目線からの新しい視点からのフィードバック得ることができました。また、幸運にも私の発表のチェアが現在ジャーナルのdeputy editorを担当されている経験豊富な研究者の方だったので、他の方からの活発な質問やコメントも促してくださっただけでなく、投稿への具体的なアドバイスと共に大きな励ましもいただきました。何をすべきかが明確になり、また気持ち的にも、国際ジャーナルへの投稿のハードルが下がりました。

そのほか、発表者は他の発表のチェアを少なくとも１回は担当する必要があり、初めて学会発表チェアの任務を経験しました。事前に発表者について調べ、論文を読んで準備をしたのですが、最低限の役割しか果たせなかったという気持ちが残りました。これは今後につながる良いチャレンジになったと思います。

３．謝辞

世界中から集まった研究者の方々との交流は大きな刺激と励ましになりました。円安の影響もあり、この助成がなければチャレンジすることは厳しかったと思います。関係者の皆様に改めてお礼

を申し上げます。またこのような助成が益々活発に活用されるように、博士学生の方々には、ぜひ支援を活用して国際学会で発表されることをお勧めします（単なる「参加」ではなく「発表」の支援であることは大きな意義があると思います。私も今回の研究集会はこれまで何の繋がりもなく、まったく初対面の方々と英語で交流をすることに不安はありました。しかしながら、同研究集会には多様性を尊重する文化があり、「日本」のケースにも強い関心を示してくださいました。そのようなきっかけがあれば、言語の壁があっても研究分野と手法の共通点からコミュニケーションは進みます。事前の準備や当日の失敗（もう少し上手くできた！という気持ち）を通して英語も上達します。私は日本国内での発表よりも、むしろ大きな励ましを得ることができました。高等教育分野の研究者として、国内の日本語での研究発表の大切さも認識しています。しかしながら、国外の研究者と交流をすること、すなわち国際的に研究発信をしていくこともまた大切なことだと感じました。特に人社系のみなさん、ぜひチャレンジしてみてください。